

文政11(1828)年、出島で会ったシーボルトと 福岡藩主黒田斉清

宮崎 克則

はじめに

本校の目的は2つある。一つは文政11(1828)年3月5日、長崎の出島にいたシーボルト(32歳)は福岡藩主黒田斉清(33歳)とどのような交流をしたのか、その「肉声」が聞こえるように実態を描くこと。もう一つは、両者の交流から約半年後に起こるシーボルト事件の風聞に、その交流がいかに使われ、どのような風聞が広がったのか、社会的背景は何かを検討することである。

まず、シーボルトと黒田斉清について簡単に記しておこう⁽¹⁾。ドイツの医者の名家に生まれたシーボルトは、ヴェルツブルク大学医学部を卒業した後、オランダに就職した。オランダ領東インド陸軍外科軍医少佐に任じられた彼の年俸は3600グルデン。グルデンは15世紀から2002年まで使われたオランダ通貨。シーボルトによると当時、金1両=12グルデンというから金300両⁽²⁾。日銀のホームページを参考に金1両=10万円とすると、年収は3000万円。27歳のシーボルトは最初から特別の待遇であった。

文政6(1823)年、オランダによるアジア貿易の基地があるバタヴィア(インドネシア)に到着したシーボルトは、出島商館の医師として日本での勤務を命じられ、同年7月に来日した。到着時の臨検において、彼のオランダ語発音が聞きとがめられ、オランダ人ではないとの疑いがかかったが、自分は「山オランダ人」だと言ってことなきをえた。

1820年代のオランダは、国家の再建に着手したところであった。つまり、1789年にフランス革命が勃発すると革命軍が侵入し、間もなくフランスに併合

されて国家としてのかたちを失っていたが、1814～15年のウィーン会議によってネーデルランド王国として存立が保証され、東アジアでの貿易を新しく発展させようとするさまざまな試みが実施された⁽³⁾。日本との貿易を再検討するための「総合的科学的」調査の任務をシーボルトは負い、多額の研究費も支給された⁽⁴⁾。調査の具体的内容は、日本の植物の種子や生体をオランダの植物園に送り、また動植物標本を本国の博物館へ送ることであった。

出島の「商館付医官」という職務は、もともとオランダ人の健康維持のためのものであったが、シーボルトは自らの博物研究に資するため、日本人に対する積極的な医療行為を開始する。日本人に瞳孔の手術をし、視力を回復させるなど、実用的で効果が目に見えやすい医療を武器として自分自身を売り込んでいく⁽⁵⁾。こうして、来日翌年の文政7年には長崎奉行の許可をえて長崎郊外の鳴滝に塾を開いて診療の傍ら日本人医師の門人たちに医学伝習を行った。その教育は、患者に接し病状を診察しながら治療法を講義するというもので、西洋式の臨床講義が初めて彼によって行われた。シーボルトは鳴滝に集まった門人たちに日本に関するさまざまな課題を与え、オランダ語の論文にして提出させた。それらは、彼が『NIPPON』を執筆するときの材料となる。

将軍に貿易のお礼を述べるための江戸参府は、寛政2(1790)年から4年に1度に変更されていたため、シーボルトは2年半近く待たねばならなかった。江戸への旅はシーボルトにとって日本の実情を観察する絶好の機会であり、彼は門人らを同行させ、各地の観察や資料収集、スケッチを行わせた。参府の旅程そのものは、通常の参府ととくに変わったもので

なかったが、この時はいつもに増して多くの人々が訪ねてきた。少しオランダ語が話せる鹿児島藩の島津重豪しげひではすでに80歳を越え、その実子で前中津藩主の奥平昌高とともにシーボルト一行を江戸の手前(大森)で出迎えた。最上徳内は数度にわたってシーボルトと会い、樺太探検の様子やアイヌの風俗など多くの情報を与えた。さらに幕府の天文方で書物奉行の高橋景保かげやすは、伊能忠敬らが作成した日本地図、蝦夷・樺太の地図および同地方への間宮林蔵の探検記などを送ることを約束し、返礼としてシーボルトは、ロシア初の世界一周をしたクルーゼンシュテルンの旅行記『世界周航記』を渡した。このことがきっかけでシーボルト事件が起こる。

文政11(1828)年の秋、シーボルトは帰国の予定であった。この年の8月、猛烈な台風が北部九州を襲う。台風の襲来は事実であり、北部九州の諸藩には多くの被害記録が残っている。この台風によって、シーボルトが乗る予定であったハウトマン号が座礁し、積荷から日本地図などが見つかり、シーボルト事件が発覚したと語られてきた。オランダ船の座礁と日本地図の没収は、もともと別々の事件であったが、当時から2つの事件は結びつけられてきた。シーボルトは、長崎奉行による取り調べに対し、一貫して協力者の名をあげることを拒んだが、結局、門人やオランダ通詞などが処罰され、シーボルトは国外追放となり、文政12年12月に日本を離れる。翌年7月にオランダへ帰り着いたシーボルトは収集した資料を整理しつつ、天保3(1832)年から20年以上にわたり、『NIPPON』・『日本動物誌』・『日本植物誌』の3部作を分冊で刊行。自費出版でありながら、多くのカラフルな図版を使い日本の文化や自然を詳しく紹介した⁽⁶⁾。

シーボルトについての最初にして最大の包括的評伝を書いた呉秀三氏によると⁽⁷⁾、シーボルトと関わった日本人として117人をあげる。もっとも多いのは「門人」の53人、多くは20代前半で鳴滝に集まった高野長英や伊藤圭介らの熱気あふれる各地の秀才たちである。つぎは「面会または交際した人びと」の25人。日本地図を渡した高橋景保をはじめ、蝦夷地

の情報を提供した最上徳内・間宮林蔵、蘭学者で幕府の医官桂川甫賢、同じく津山藩医の宇田川榕庵や名古屋の水谷助六など、当時の日本を代表する植物学者であり、彼らがシーボルトに贈った植物標本は今もオランダに現存している。シーボルトが会った「諸侯」、つまり大名は少なく6人である。半分の3人は10代後半の若殿様であり、会話を交わしたのは鹿児島藩の島津重豪、中津藩の奥平昌高、福岡藩の黒田斉清の3人である。

シーボルトに剥製の作り方を習いたいという島津重豪、彼の次男で豊前中津藩の藩主となった奥平昌高は「日蘭」「蘭日」の辞書を作り、シーボルトの自筆日記によると、オランダ人と近づきになるために、シーボルト参府の前年、文政8年に45歳で隠居した⁽⁸⁾。現役の大名でシーボルトと直接に会ったのは福岡藩の黒田斉清だけである。斉清が公然とシーボルトに会えたのは、福岡藩・佐賀藩が隔年で約1000人の家臣を派遣する長崎警備にある。福岡・佐賀の藩主には長崎の視察が義務づけられており、長崎の台場視察とともに、出島の視察も公務の内であった。ただし、6年半のシーボルト在日中、斉清が彼に会ったのは文政11年3月5日の1回のみである。

黒田斉清は、寛政7(1795)年に1歳で福岡藩主となる。幼少期から鳥が好きで、飼育してその生態を観察していた。ガチョウの生態についてまとめた『鶯経』や京都の本草学者小野蘭山『本草綱目啓蒙』を補足した『本草啓蒙補遺』などの著作がある。その他、100巻以上の標本や図鑑があったが、文久3(1863)年にそれらを江戸から福岡へ運ぶときに紀州沖で船が難破してしまった。その他に洋書も持っていたが、現在、福岡市博物館にある「黒田家資料」には1冊も残っていない。斉清は目が悪く、最後は失明するが、その後も植物の葉を臭って何の植物であるかを同定したという⁽⁹⁾。弘化・安政頃に出た「愛物産」家の番付によると⁽¹⁰⁾、行事は小野蘭山、西大関は「楽善堂」の黒田斉清、東大関は「致知春館」の前田利保とある。前田利保は富山藩主、天保7(1836)年に規則ができた緒鞭会しゅべんの中心メンバーである。大名・旗本を中心

とする緒鞭会は、月8回、持ち回りで会合を開き、自然物を持ち寄り協議する博物研究会であった。この会に黒田齊清が参加した記録はないが、緒鞭会のメンバーとの交流が頻繁であったのは平野満氏の研究に詳しい⁽¹¹⁾。なにより、齊清は番付に載るほど世間に知られた学者であった。

彼はシーボルトに会ったとき、17歳の世嗣の黒田長溥^{ながひろ}を連れて行っている。長溥は島津重豪の12男で齊清の養子となっていた。齊清とシーボルトはどのような「話」をしたのか、これまでの研究史から見ていこう。

〔注〕

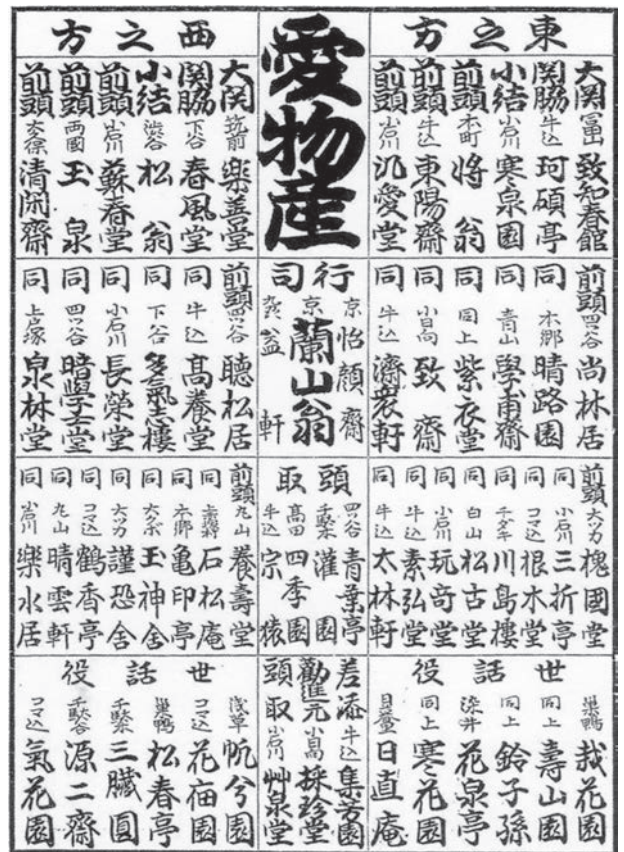
- (1) シーボルトについては多くの研究がある。容易に入手できるのは松井洋子『ケンペルとシーボルト』(山川出版社、2010年)。また研究史については香澤宣賢「シーボルト研究の現在」(『洋学』21号、2013年)がある。
- (2) シーボルトは著書『NIPPON』のなかで、1テール=2グルデン、6テール=金1両としている(宮崎克則「シーボルト『NIPPON』の捕鯨図」(『九州大学総合研究博物館研究報告』7号、2009年)。
- (3) 横山伊徳『開国前夜の世界』206頁(吉川弘文館、2013年)
- (4) 文政7(1824)年の「オランダ領東インド植民地総督決議録抜粋」によると、「外科医少佐フォン・シーボルトによる請願書とそれに添え書きされた予算額の通り、同医の日本における博物館研究に対して年額8131グルデンを与えることを承認する」とある(栗原福也編訳『シーボルトの日本報告』41頁、平凡社東洋文庫、2009年)。現在の額に概算すると、年6800万円の研究費となる。
- (5) 文政7年の1824年8月4日付、シーボルトが出島から母と伯父に宛てた手紙に、「とりわけ人工瞳を作って、10年間盲目だった貴人の視力を回復させました。これは非常に評判を呼びました」とあるように、白内障の手術は評判となった(宮坂正英他「フォン・ブランデンシュタイン家所蔵、1824、1825年シーボルト関係書簡の翻刻並びに翻訳(1)」『鳴滝紀要』16号、2006年)
- (6) シーボルト『NIPPON』の書誌学的研究については、宮崎克則「シーボルト『NIPPON』の色つき図版」(『九州大学総合研究博物館研究報告』5号、2007年)、同「シーボルト『NIPPON』のフランス語版」(『九州大学総合研究博物館研究報告』6号、2008年)、同「シーボルト『NIPPON』の捕鯨図」(『九州大学総合研究博物館研究報告』7号、2009年)、同「シーボルト『NIPPON』のロシア語版」(『九州大学総合研究博物館研究報告』8号、2010年)、同「シーボルト『NIPPON』の原画・下絵・図版」(『九州大学総合研究博物館研究報告』9号、2011年)
- (7) 呉秀三『シーボルト先生－其生涯及び功業』(吐鳳堂、大正15年)。東洋文庫の『シーボルト先生－その生涯及び功業』1・2・3巻(平凡社、1967～68年)は資料編を除いた本文編のみの復刻。
- (8) 芳即正『島津重豪』(吉川弘文館、1980年)、ヴォルフガング・ミヒェル「中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について」(『中津市歴史民俗資料館分館 村上医家史料館資料叢書Ⅴ 人物と交流Ⅰ』、2006年)。シーボルト自筆日記(斎藤信訳『シーボルト 参府旅行中の日記』思文閣出版、1983年)には、つぎのようにある。

れた。われわれと知り合う機会をえるため、これまでは身分や境遇のため、こういう訪問は許されなかったのである。…(中略)…84歳の高齢である薩摩の御隠居は、とくに話し好きで、目や耳も御丈夫で、まだ立派な体格をしておられたので、せいぜい65歳ぐらいに見えた。会話の間、ときどきオランダ語をはさまれ、そしていろいろな物の名を質問された。使節との話が終わると、御隠居はこちらを向いて私の名を呼び、自分は動物や天産物の大の愛好家で、四足の獣や鳥や昆虫の皮を剥いたり、保存したりする方法を習いたいと言われたので、私は喜んでその役目をお引き受けした。

[4月11日]

中津の御隠居が夕方こられるという通知を受け取った。…(中略)…御隠居は30年来の友であるオランダ人と一度近づきになりたいという動機で隠居された。そうしなければ、大名がわれわれと親しく交際することは出来ないからである。

- (9) 明治29年「従二位黒田長溥公伝」(川添昭二他校訂『新訂黒田家譜』6巻、文献出版、1983年)、井上忠「福岡藩における洋学の性格」(『日本洋学史の研究』Ⅰ、創元社、1968年)、井上忠「福岡藩の洋学」(『九州大学医学部七十五年史』、九州大学出版会、1979年)
- (10) 弘化・安政頃「愛物産」家番付(『彩色 江戸博物学集成』平凡社、1994年)



- (11) 平野満「天保期の本草研究会『緒鞭会』」(『駿台史学』98号、1996年)、同「黒田齊清と江馬春齡・山本亡羊の交流」(『明治大学人文科学研究所紀要』45号、1999年)

[4月10日 月曜日]

大森の村には、薩摩と中津の御隠居が江戸から来て待っておら

1. シーボルトと黒田斉清の交流をめぐる 研究史とその史料

シーボルトと黒田斉清の交流を記す最初の記事は、黒田家の修史事業として編纂された明治29(1896)年『従二位黒田長溥公伝』にある⁽¹⁾。その第一編「公の言行」に、

文政十一年戌子ハ長崎警備の当番年にして、斉清君長崎へ巡視せらる。此時公ハ世子にして、之に随ひ、始めて長崎へ赴かれたり。此頃長崎に有名なる植物学者来り居れり。此人ハ独逸連邦の産にして、其名を「エスフォン、シーボルト」と云ひ、夙に東洋の植物を蒐集せんと欲する志あり…(中略)…、斉清君の常に意を動植物に留められしハ、前に述へしか如し。故に長崎巡視せらるる毎に、必ず此人に面会して、動植物併て医術等の事を質問せられしに原因せり。公も此時始て「シーボルト」に面接して、種々の談話を交しへ、益す西洋学理の精密にして、実用に適切なるを感じられたり。

とある。文政11年は福岡藩による長崎警備の当番年であり、養父の斉清とともに長溥は初めて長崎の見廻りに出かけ、出島でシーボルト(文中では「シーボルト」とある)に会った。動植物に詳しい斉清は、シーボルトと動植物や医学について話した、とある(ただし、長崎見廻りのたびごとに会ったとあるが、これは間違い)。『公伝』が編纂された明治期、黒田家に両者の交流をしめす何らかの記録があったであろうが、何の記録によったのか記されていない。

同じ明治29年、シーボルトに関する最初の評伝が出版された。呉秀三『シーボルト 其生涯及ビ功業』である⁽²⁾。呉氏は広島藩の支藩新田藩に仕える藩医であった呉黄石の3男。母は江戸でシーボルトに会ったことのある箕作阮甫(津山藩医)の長女であったから、彼は母からシーボルトのこと、シーボルト事件のことを聞いて育った。東京大学医学部に入り、卒業後に大学院へ進み、東京大学医科大学助手とな

り、明治27年に「シーボルト翁の伝」という論文を『中外医事新報』331～333号に発表した。この論文が佐野常民⁽³⁾の目にとまる。佐野は明治29年が「シーボルト生誕100周年」だったので、著書としての出版を勧め、本文120ページの『シーボルト 其生涯及ビ功業』が上梓された。このなかで、呉氏はシーボルトの伝記を簡潔にまとめ、交流した人々として門人の高野長英や伊藤圭介、最上徳内などを記しているが、黒田斉清のことは出てこない。出てくるのは30年後のことである。

呉氏は、東京帝国大学医科大学精神病学教授として、かつ東京府巢鴨病院医長として、日本における精神病患者の社会的地位や療養環境の改善に力を注ぎ、その間もシーボルトに関する資料の収集を続け、退職後の大正15(1926)年、1000ページを越す大著『シーボルト先生－其生涯及ビ功業』を出した⁽⁴⁾。現在においてもシーボルト研究の基本書である。本書の中で、文政11年3月5日に出島でシーボルトと斉清が会ったことを記し、その史料として『下問雑載』をあげる。こうして『下問雑載』の存在が広く知られることとなった。ただし、呉氏より前の大正10年、福岡県の地方誌に伊東尾四郎が論文を掲載していた⁽⁵⁾。彼は、大正7年に開館した福岡県立図書館の初代館長。開館時に13冊、4000円の本を購入した。それはシーボルトの『NIPPON』『日本動物誌』『日本植物誌』の3部作、辞書類の「日本書編」である。伊東氏は東奔西走して寄付金を集め、ようやく麻生太吉からの寄付金で購入することができた。どうして買おうしたのか。彼は論文のなかで「シーボルトは又黒田侯にも関係がある」からと記す。当時、シーボルトと斉清の交流について、福岡地域に「口碑」は伝わっていたが、確たる史料がなかった。ようやく『下問雑載』を見いだして紹介した。これ以降、呉氏も含めて『下問雑載』をもとにシーボルトと斉清の交流が語られていくことになる。

まず、文政11年に福岡藩主が長崎見廻りに行ったかどうかを裏付けよう。文政10(1827)～12年『御部屋日記』⁽⁶⁾は、福岡城内にある長溥の「御部屋」の日記

である。城外での動静について記事は少ないが、文政10年9月28日に「若殿様」長溥が初入国したこと。同11年2月28日に「若殿様長崎御番所為御見習、今朝六時」に出発したこと、その際に「殿様一同」とある。つまり藩主斉清が、初入国した長溥を伴って長崎に出発している。斉清は唐津を經由、長溥は佐賀を經由して長崎へ向かった。3月11日に帰城しているので、長崎見廻りの期間は13日間であった。

他年度の事例とも比較すると、同12年の場合、眼病治療のために在府中の斉清に代わって、長溥が4月28日に福岡城を出発、5月8日帰城の11日間であった。さらに、藩主斉清のみが長崎へ行った文政8年と10年の場合⁽⁷⁾、文政8年(9月15～25日)は11日間、同10年も(9月15～25日)11日間であった。つまり福岡藩主の長崎見廻りは11日間ほどで終わるが、文政11年の場合は、出島でシーボルトに会ったこと、長溥が初めてであったことから、通常よりも2日ほど長かった。なお、斉清のみが行った文政8・10年のとき、出島にシーボルトはいたが、両者は会っていない。会ったのは文政11年のみであることも記録からわかる。佐賀藩主の場合は、より長崎に近いので期間は8日間であった⁽⁸⁾。両藩主が長崎見廻りに行く時期は、警備を交代する3～4月頃、オランダ船がやってくる6～7月頃、オランダ船が帰る9月頃。3度ともに行く場合もあるが、どこかの時期を見計らってそれぞれ長崎へ行っている。

つぎに、長崎側の記録で斉清が出島に入ったのかどうか確認しよう。元禄2(1689)年に完成した唐人屋敷の門番として設置された地役人の唐人番⁽⁹⁾は、後に出島の出入りも管理するようになり、その記録にはどの大名がいつ出島に入ったかが記される。享和1(1801)～天保12(1840)年『唐人番倉田氏日記』⁽¹⁰⁾には、文政11年3月5日「筑前太守松平備前守様・松平美濃守様御父子出島御入」とある。松平備前守は黒田斉清であり、長溥とともに出島に入っている。その他の記事には、長崎の警備に関与する北部九州の大名たちがときどき出島や唐人屋敷に入ったことも記されている。

出島の中でシーボルトに会ったかどうか、商館長

メイランの『蘭館日誌』を見よう。その1828年4月18日(文政11年3月5日)の記事の見出しに「Bezoek van den Landsheer van Tikwiesen, met zijnen aangenomen zoon(養子の息子を伴った筑前の藩主の訪問)」とあり、本文を訳すと⁽¹¹⁾、

前もって連絡を受けていた筑前藩主と重要な時を過ごした。同日私は彼の訪問を受けた。彼は養子の息子を同伴してきた。彼の訪問は出島にとって重要なことである。私はできる限りの接待を彼らにしたことを光榮に思う。彼は、商館長の部屋から医師シーボルトの家へ行った。彼は、医者のおきちんと整理された珍しい自然コレクションを観覧した。夕方、彼と供回りは一緒に長崎へ帰った。彼は接待を大変満足して楽しんだ。

となる。黒田斉清は長溥とともに出島に入り、商館長との面会后、シーボルトの部屋へ行き、動植物のコレクションを見て夕方に「大変満足」して帰ったことがわかる。

2人が会ったことは裏付けできたので、これまでその交流をしめず記録として使われてきた安部龍平『下問雑載』について検討しよう。まず、『福岡藩士明細帳』⁽¹²⁾にある安部家の系譜をあげる。

○博多聖福寺内 安部家

先祖 齊清御代ヨリ士官 本家末家無之

安政七年申正月廿九日、於長崎表出奔仕候
ニ付家名断絶被仰付、以後青木善平ト姓名
ヲ相改メ申候

御切米六石三人扶持 養父半礼安部忠内、

表粕屋郡名島村実父百姓清蔵 安部龍平

自分屋敷 荒戸谷町

文政二卯年 三十六歳

文政二年十月廿六日被召出、直礼城代組○同年十一月廿日長崎詰方中、役料小使給米雑用銀被下、同七年十二月十八日長崎詰方以来御免○同十二年三月十日母九十歳書付渡り○天保三年

十二月一日御目録書付渡り○六年八月十四日御納戸組○同七年九月廿八日御心付米五俵宛○同十年九廿日養子○同十三年六月朔日養子離別○弘化二年九月廿日下女取上後妻○同四年十一月四日米十五石四人扶持当り被下御心付米ハ被召上○嘉永元年十月十五日聳養子

福岡藩内の名島村の百姓の子として生まれた安部龍平は、藩内の蘭学者青木興勝にオランダ語を学び、後に長崎問役の従僕として長崎へ行って志筑忠雄(宝暦10～文化3年、オランダ通詞・蘭学者)に学んだ。その後、いったん帰国して安部家の養子に入る。文政2年に下級家臣の「直礼城代組」となり、同2～7年には「長崎詰方」としてふたたび長崎に行った。号は蘭圃・蘭畝⁽¹³⁾。

安部と志筑忠雄の共同著作として『二国会盟録』⁽¹⁴⁾がある。その「凡例」に「露西亜ノ使節彼土ニ来テ通商ノ道ヲ闢ント乞フ」とあり、作成の契機として、文化1～2(1805)年に通商を求めて来日し、幕府から拒否されたロシア使節レザノフの長崎来航があった。『二国会盟録』の内容は、1689年にロシアと中国が国境・交易について結んだネルチンスク条約の事情を報告したものであり、原書は清国使節に通訳として随行したフランス人宣教師ジェルビヨンの旅行記(オランダ語版)であった。「凡例」は文化3年正月の日付であるから、同年7月に死去する病床の志筑忠雄が口訳し、安部が筆記したものである。ロシアによるアジア進出を1689年のネルチンスク条約から説いた『二国会盟録』の原稿を、安部は福岡に持ち帰り、数十冊の漢籍・蘭書を参照し、相当な年数をかけて補訂作業を行ったうえで、文政9～10(1827)年に福岡藩の儒学者亀井昭陽らに序にあたる「題言」を乞い、出版を企てた⁽¹⁵⁾。本書は藩主斉清に上呈され、安部は藩主の蘭学顧問となり、天保2(1831)年には、斉清の国防論に安部が補注をつけた『海寇窃策』も完成させている⁽¹⁶⁾。

文政11年に安部がまとめた『下問雑載』の内容を見てみよう。現存するのはいずれも写本であり⁽¹⁷⁾、序に「侯以世子、巡視崎鎮戍營、例一日入蘭館、遂

召見西医矢意暴尔杜、斯意暴尔杜都逸国倍月連之人也」とある。「侯」= 斉清が「世子」= 長博とともに長崎見廻りを行い、出島で「矢意暴尔杜」・「斯意暴尔杜」= シーボルトに会ったこと。シーボルトの出身地はオランダでなく、ドイツの「倍月連」= バイエルンであると記されている。跋文に相当する「附言」にも「都逸国ハイエレンノ内ウツルピユルグノ産也」とある。当時、ヴィッテルスバッハ家の国王が治めたバイエルン王国に、シーボルトの出身地ヴェルツブルクは含まれていたから、正確に理解していたことがわかる。安部のシーボルトに関する評価は、「附言」に、

今歳三月長崎ニ祇役シテ蘭館ニ到ル後、先斯伊勃兒杜(※シーボルト)ニ会スルコト数回ナリ、其才学尋常ノ蘭人ニアラス、殊ニ勉強苦学ノ夷ナリ…(中略)…将来本草ノ書及皇国ノ事ヲ著述セント欲スル意アリ

とある。安部は、シーボルトが日本の植物や政治・文化についての本を出そうという意欲を持ち、並のオランダ人ではないと評価している。彼は、3月に斉清に従ってシーボルトに会った後も『下問雑載』を仕上げるために何度か会っている。「祇役」とは主君の命で出張することを意味する。従来、この記事をもとに、斉清とシーボルトが何度も会ったように記されることがあったが、それは誤りであり、シーボルトに何度か会ったのは安部である。

『下問雑載』には35の問答が記される。記載形式は斉清の「問」があり、それに対するシーボルトの「答」がある。植物や鳥、世界の地理さらに「カップ」についての問答がある。すべてを記載できないので、いくつかの概要を記す⁽¹⁸⁾。

● 斉清は「出島でキナ樹とされる樹は日本のゴマギと同じである。ボイスやオーイツの書にあるキナや、江戸の桂川甫賢が洋書のキナを模写して贈ってくれたものとは少し違う。キナ樹はペルーのみに生ずると聞いているが」と問う。シーボルトは「彼らの書は

50年前のものです。キナ樹は南アメリカに30種あり、私は出島のゴマギを強いてキナ樹と言っているのではありません。常々その皮を試したいと思っており、効いたらゴマギは日本のキナ樹です」と答える。

●齊清は梅・桜・カエデについて、「ドドネウスの『草木譜』や中国の書によれば、西洋と中国にはそれらの品種は少ない。日本はその多いこと世界一であろう」といい、風土によってこうした差を生ずるのかと尋ね、カエデの押し葉約100種を贈った。これに対しシーボルトは、日本の梅は野生梅と杏の変種であり、風土と人工により種々の奇品を生むと説き、カエデの押し葉のなかで野生のものは12種であり、後日名称をつけて報告すると約束している。

●燕・鶴など渡り鳥について、齊清はどこから飛来し、いつ帰るのか、またその理由などを、緯度と気候の関係を踏まえて述べ、シーボルトも意見を返し、「貴説ノ如シ」と言った。後日、齊清はシーボルトに日本産鳥類の一覧表を贈っている。

●同じ緯度に住む人間の容貌は大体同じだろうと考える齊清は、「日本と同緯度にあるポルトガルや地中海北辺の人々は、日本人に似ているだろう」と問う。シーボルトは「皮膚や髪の色が似ていても、人種が異なる」と力説し、日本人について「北方は東韃靼の子孫、南方は印度支那人の子孫、中央が真の日本人であろう」という。問答の注記として、安部龍平はケンペル『日本誌』にも日本人の起源を韃靼人とする説があったことを紹介しながら、「我日本人ハ神孫」であるという。

●カッパについて、齊清はシーボルトに3枚の写生図をしめして尋ねた。それを見たシーボルトは「奇異怪説」にすぎないという。齊清は「写生図は薩摩の島津重豪が実物を写生したものだから疑いない」といい、藩内には何人もカッパを目撃した者がいると強調する。シーボルトは、自分は見たことないが、カッパがいるならばそれは亀の一種だろうと返す。

要するに、文政11年11月に完成した『下問雑載』は、半年以上をかけてまとめられた安部のレポートである。これをもとに齊清とシーボルトの「肉声」を聞くことはできないので、新たな史料を提示する。それは『雑事叢書』である。

現在、長崎歴史文化博物館の所蔵であるが、もとは市立長崎博物館の所蔵、昭和24年に永見徳太郎氏が寄贈した。永見氏(明治24～昭和26年)は家業の倉庫業の傍ら長崎市議員を務め、俳句や小説も書く文化人であり、『長崎の美術史』の著作もある⁽¹⁹⁾。彼が寄贈した『雑事叢書』はもともとどこかの蔵書であったのか。蔵書印に「田藩文庫」「田安府芸台印」とある。つまり、これは8代将軍徳川吉宗系統の御三卿、田安家の史料である(平成3年、田安家の史料は国文学研究資料館に寄託)。大正1年に田安家で作成した『御書物目録』には44冊の「雑事叢書 写」があったことが記されている⁽²⁰⁾。そのうちのどれかは不明ながら、昭和13年に東京の神田で競売が行われた。『徳川田安家御旧蔵入札目録』には「雑事叢書 写本 二五冊」とある⁽²¹⁾。このとき永見氏が『雑事叢書』を購入したのではないと思われる。

同じ装丁の表紙がある『雑事叢書』は大阪歴史博物館蔵の「羽間文庫」にもある。「羽間文庫」は羽間平三郎氏(明治28～昭和47年)が収集した天文・大阪関係の史料であり、「羽間文庫」の『雑事叢書』には「月食所見図」が含まれている。推測の域を出ないが、昭和13年の田安家蔵書の競売において、シーボルトと齊清の間答が記される『雑事叢書』を永見氏が買い、天文関係が含まれる『雑事叢書』を羽間氏が買ったのではないと思われる。これらは、田安家3代の齊匡(天明7～天保7年)時代、大名・旗本等から琴書や兵法書などを借りて書写し、蔵書の充実をはかったというから⁽²²⁾、その頃に筆写されたものと考えられる。ただし、現存する『雑事叢書』にはどこから借用して写したのか記されていない。

つぎの問題は、『雑事叢書』に記されるシーボルトとの問答は、黒田齊清でなければ書くことができない、なぜ田安家で写すことができたのか、である。上野益三氏の成果によると⁽²³⁾、田安家の奥詰めで、

蘭学の知識がある吉田正恭なる人物は九市ともいい、楮鞭会に出席していた、とある。齊清が楮鞭会のメンバーと頻りに交流していたことは平野満氏の成果⁽²⁴⁾に詳しいから、この吉田を介して、田安家で写されたと考えられる。

〔注〕

- (1) 『従二位黒田長溥公伝』(川添昭二他校訂『新訂黒田家譜』6巻、文献出版、1983年)
- (2) 呉秀三『シーボルト 其生涯及ビ功業』(『呉秀三著作集』1巻、思文閣出版、1982年)
- (3) 佐野常民は文政5(1823)年～明治35(1902)年の政治家。旧佐賀藩士。日本赤十字社の創始者。官職は枢密顧問官、農商務大臣、大藏卿、元老院議長。勲等は勲一等、爵位は伯爵。吉川龍子『日赤の創始者佐野常民』(吉川弘文館、2001年)
- (4) 呉秀三『シーボルト先生－其生涯及ビ功業』(吐鳳堂、大正15年)
- (5) 伊東尾四郎『黒田侯とシーボルト』(『筑紫史談』23号、大正15年)、森田千恵子「なぜ、福岡県立図書館にシーボルトがあるのか」(宮崎克則他編『ケンペルやシーボルトたちが見た九州、そしてニッポン』海鳥社、2009年)
- (6) 文政10～12年『御部屋日記』(『黒田家文書』233.234.235号、福岡県立図書館蔵)
- (7) 文政8年『長崎御越座御往来日記』・文政10年『長崎御越座記』(『福岡県史編纂資料』41・42号、福岡県立図書館蔵)
- (8) 文化9年『長崎両度御越日記』・天保7年『長崎御越日記』(『鍋島文庫』口6-23号、佐賀県立図書館寄託)
- (9) 旗先好紀『長崎地役人総覧』112頁(長崎文献社、2012年)
- (10) 享和1～天保12『唐人番倉田氏日記』(『松木文庫』316号、九州大学記録資料館九州文化史資料部門蔵)。その他の大名たちが出島・唐人屋敷へ出入りしたことについて、享和3.7.23「大村上総之介様両館御入」。文化4.5.1「唐津城主水野和泉守様出島御入」。文化4.5.28「平戸城主松浦肥前守様出島御入」。文化5.6.28「筑前秋月黒田甲斐守様出島御入」。文化8.4.16「筑前太守松平備前守様出島御入 追而御樽肴当番へ被下置」。文政1.6.11「小城城主鍋島加賀守様両館御入」。文政2.6.6「島原城主松平主殿頭様両館御入」。文政7.5.30「唐津城主小笠原鎌之助様両館御入」。天保1.7.4「肥前太守松平信濃守様両館御入」。天保3.4.3「有馬玄蕃頭様家中、久松碩次郎召仕同道館内へ入」。天保3.8.28「大坂御船手太田運八郎殿組同心三人両館入、御役所付同道」などの記事がある。
- (11) メイラン『蘭館日誌』(日蘭交渉史研究会編、1959年)
- (12) 『福岡藩士明細帳』(『檜垣文庫』302-80号、九州大学記録資料館九州文化史資料部門蔵)
- (13) 大熊浅次郎「筑前藩蘭学の泰斗安部龍平」(『筑紫史談』82号、1942年)、井上忠「福岡藩における洋学の性格」(有坂隆道編『日本洋学史の研究』I、創元社、1968年)
- (14) 『二国会盟録』(『福岡県史編纂資料』56号、福岡県立図書館蔵)
- (15) 鳥井裕美子「『鎖国論』・『二国会盟録』に見る志筑忠雄の国際認識」(『志筑忠雄没後200年記念国際シンポジウム報告書』、長崎文献社、2007年)
- (16) 井上忠「福岡藩の洋学」(『九州大学医学部七十五年史』、九州大学出版会、1979年)、『海寇窃策』(『日本海防史料叢書』2巻、クレス出版社、1989年)
- (17) 現在、3点の写本を確認している。「福岡県史編纂資料」(43号、福岡県立図書館蔵)と「檜垣文庫」(38-3-5号、嘉永6年写、九州大学記

録資料館九州文化史資料部門蔵)の他に、2007年に購入されたシーボルト記念館の所蔵本

- (18) 宮崎克則・原美枝子「黒田齊清・黒田長溥－好學・開明的なふたりの藩主－」(鳥井裕美子他編『九州の蘭学』、思文閣出版、2009年)参照
- (19) 小山幸伸『幕末維新期長崎の市場構造』(お茶の水書房、2006年)
- (20) (21) (22) 国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究』(青裳堂書店、2006年)
- (23) 上野益三『日本博物学史』128頁(平凡社、1973年)
- (24) 平野満「天保期の本草研究会『楮鞭会』」(『駿台史学』98号、1996年)

2. 交流の「肉声」－『雑事叢書』の記事－

【図1】が『雑事叢書』の表紙であり、内容は、文政13(1830)年に起こった京都の直下型地震に関する記録の写しをはじめ、寛保元(1741)年の「竹千代様御元服」・寛政7(1795)年の「小金野御鹿狩」など、そして「蘭館紀事」がある。合冊されている5つの記事に関連性はなく、それぞれに筆跡も異なり、借用元も書かれていない。まさに「雑事」の「叢書」である。表紙の右下に「田藩文庫」、内部に「田安府芸台印」の蔵書印があり、国文学研究資料館寄託の「田藩文庫」と同じ印であることを確認できる⁽¹⁾。

【図2】が内表紙、【図3】が「蘭館紀事」の書き出し部分である。



【図1】『雑事叢書』の表紙
(長崎歴史文化博物館蔵)



【図2】『雑事叢書』の内表紙「蘭館紀事」



【図3】「蘭館紀事」の書き出し

蘭館ニ至リカピタンノ住スル処ニユク、大ナル櫓有、
蘭人四人出迎ヒ恭ク礼ヲナシテ先行ス、町年寄
高木豪之助付添、通事石橋助左衛門・同助十
郎・吉雄忠次郎・名村三次郎從テ世話ヲナス

出島の建物は1階が貿易品の荷物倉庫、2階が居
住スペースとなっており、商館長の部屋へ行くには
大きな階段を登らねばならない。「カピタン」=商館
長メイランら「蘭人」4人が出迎え、オランダ通詞の
石橋助左衛門・石橋助十郎・吉雄忠次郎らが付き
添っていた。記事の全文を紹介することはできない
ので、概要をしめす。

商館長に挨拶し、カステラをご馳走になり、オラ
ンダ王がフランスに勝利した絵を見せられた黒田齊
清は、「アムストルダム及ロツトルダム」の気候につ
いて質問した。通詞を介して「此方の京・大坂等ノ
如シ、気候ハ此方ニ比スレハ、彼カ大暑ハワガ五月
ノ如シ」との返答を得る。昼頃、彼は早くシーボル
トの部屋へ行こうと思ひ席を立った。しかし、

午ノ半過ル比ナレハ、シーボルトカ所ニユカン
トテ立ントスルニ、助十郎出テ玉ツキ見ヨトテ、
腰掛ニ飾ヲ設ケタル所ニ案内ス

とあるように、通詞の石橋助十郎からビリヤード見
物を勧められ、これを見物して「玉ツキハ、玉ヲツ

キ合ヒ、玉ノ止リタル数廿四ヲ勝トスル也」のルー
ルも教えてもらう。

〔桜とカナリヤの問答〕

その後、ようやくシーボルトの部屋に行くことが
できた齊清は、皮に綿を詰めた動物の剥製、昆虫や
蛇などの標本を目撃する。

夫ヨリドクトールノ住スル所ニユク、ドクトー
ル名ハシーボルトトテ名高キ博物ノ医也、室内
皆諸国ノ鳥・虫及ヒ獸類モ有、鳥獸ハ皮ニ綿ヲ
ツメ、虫ハ乾シテ樟腦ヲミテ蛇ハ焼酒ニ浸ス、
ピロウドキンクロノ雄一羽ヲ出シ示シテ名ヲト
フ…(中略)…ナルホドト此方ノ言ヲナシテ解タ
ルモヤウ也

会話は、剥製の黒鴨(「ピロウドキンクロ」)の名前は
何かということから始まった。齊清は、予め質問をい
くつか準備してきており、図も用意していた。これ
に関する記事をあげる。

忠次郎ニ桜及カナリヤ鳥ノ写生ヲ出サシム、此
二図ハ予携来テ兼テ忠次郎ニサツケ置シナリ、
桜図ヲサシテウイラデト云、又庭木ノ枝ヲサシ
テタムトイヘハ唯々…(中略)…カワラヒワノ図ヲ
出シ、予ヤパンステウイラデカナリースフォゴ
ルトイヘバ其通也ト答フ、又青キカナリヤ及

カーブスカナリヤ二図ヲ指テウィルデカナリヤト云、又黄羽ノカナリヤヲ指シテタムメカナリヤトイヘバ、其通ノコト也、ヨク案ヲツケラレタリト云

齊清は、通詞の吉雄忠次郎に桜とカナリヤの図を持たせてきており、それをシーボルトに見せ、桜の図を指して「ウィルデ」と言った。「ウィルデ」はWilde、野性種の意味である。そして庭の木を指して「タム」と言った。「タム」はTam、園芸種の意味。さらに「カワラヒワ」「青キカナリヤ」「カーブスカナリヤ」「黄羽ノカナリヤ」の図を指して、野性種・園芸種の別を言うと、シーボルトは「ヨク案ヲツケラレタリ」と言った。

これらの桜・カナリヤ図はシーボルトに手渡され、今もシーボルトコレクションとして残っている。オランダのライデン国立民族学博物館にあるシーボルトコレクションの一つに、題箋に『筑前侯所著物産説』と記された和綴じ本がある。【図4】が表紙。【図5】が「WILDE」と「Tam」の桜。【図6】が「Wilde」の「カハラヒハ」と「Tam」の黄色のカナリヤである。もともと齊清がシーボルトに渡したとき、これらの図は一枚一枚の和紙に描かれていたが、そのままでは保存に適さないので、シーボルトは裏打ちして製本している。【図5】に明らかのように、和紙の全面を裏打ちするのではなく、四隅を和紙で裏打ちして製本している。『筑前侯所著 物産説』の最後には3種類のカップ図があり、そのうちの一つを【図7】にしめす。

これらの図を誰が描いたのか。福岡藩の御用絵師尾形家に残る絵手本帳の『獣類写生帖』（寛政～嘉永期）⁽²⁾に同じモチーフのカップ図（【図8】）があるから、御用絵師に描かせて図を準備し、シーボルトに渡したことがわかる。

〔白鳥の問答〕

齊清とシーボルトは、つぎに白鳥について論争する。【図9】がそれに関する部分である。

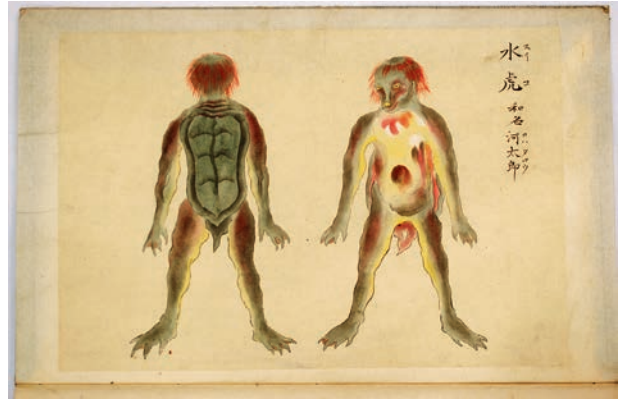
彼レ立テ鶴ノ皮ヲ取テ示ス、予ズワ、ントイヘハ、彼レ白鳥ト答、予笑ヘハ彼レモマタ笑ヘリ、又予スワ、ン数品アリヤ、ビュイスノ書中ニタムメスワ、ン・ウィルデスワ、ン二品ヲノス、予思フニタムメスワ、ンコレナシトイヘハ、カレ有ト答、予妄言ナラムトイヘハ、彼ヤパンニ品アリト聞、是一品ハタムメスワ、ンナラント、予二品トモニウィルデスワ、ント答テ、一品嘴足黄ナルハ奥ノ仙台ノ産也、予未タ此ヲミズトイヘハ、彼レナルホドト云、其夜シーボルト寝ズシテ、アマタノ書ヲ検シタルニ、ビュイス書中ノタムメスワ、ンハ妄言ナリト、翌日忠次郎シテコトワリ書ヲイタセリ

まだ剥製として完成していない白鳥（「鶴」）の皮を見せたシーボルトに対し、齊清は「ズワ、ン」と言い、シーボルトは「白鳥」と言った。齊清は、「ビュイス」の本は間違っており、「タムメスワ、ン」はいないと言う。園芸種の白鳥はいないとする齊清に対し、シーボルトは「有ト答」える。少し論争となったのであるが、その夜、シーボルトは徹夜してさまざまな本を調べ、翌日には自分が間違っていたとして「コトワリ書」を通詞の吉雄忠次郎を介して齊清に送っている。両者は文政11年3月5日に会い、翌日も齊清は長崎にいたので、シーボルトは早速、長崎の五島町にあった福岡藩の蔵屋敷に知らせたのである。自分の間違いは潔く謝っている。この記述から、「蘭館紀事」が書かれた時期は、3月5日からあまり日が経たないうちに、齊清が口述筆記させたものであろうことが想像される。

2人ともに見ていた「ビュイス」の本とは何か。これは、現在ではカタカナでボイス(Buys)といわれ、彼が編訳した『新修学芸百科事典(Nieuw en volkomen woordenboek van konsten en weetenschappen)』と考えられる。イギリスで刊行された学芸百科事典にもとづきボイスが翻訳・増補編集したもので、全10巻。明和6～7(1770)年にアムステルダムで刊行され、大槻玄沢などの蘭学者に広く利用された。そのなかに白鳥の項目があり、オランダ語文を翻訳すると、



【図4】「筑前侯所著 物産説」表紙
(ライデン国立民族学博物館蔵)



【図7】カッパ図



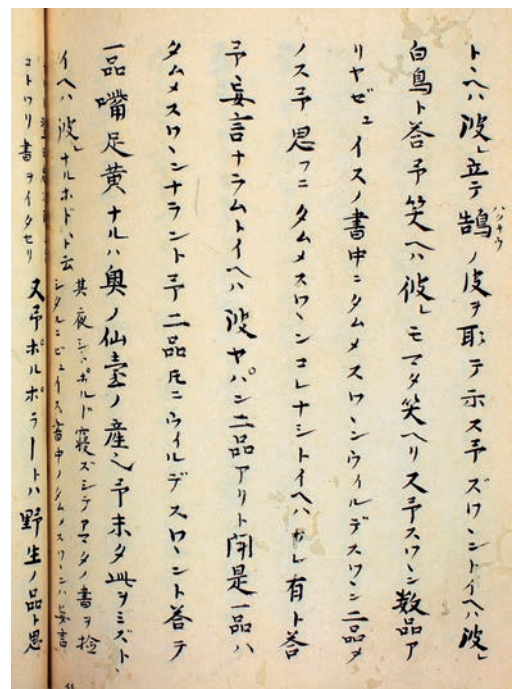
【図5】「WILDE」と「Tam」の桜



【図8】『獣類写生帖』のカッパ図
(福岡県立美術館蔵)



【図6】「Tam」の「カナアリアヤ」と「Wilde」の「カハラヒハ」



【図9】「蘭館紀事」の白鳥問答

Cygnus(鳥類学において)。白鳥。よく知られている水鳥で、形と大きさはガチョウの様であるが、首がそれより長い(図LVIの1の挿絵を参照)。口が小さく、上の部分は太く、口の端には平らで軽く曲がっていて赤い。首が28個の脊椎骨からなっている。白鳥の体中に数多い柔らかい雪のような真っ白の羽が付いている。概ねに川で過ごし、そこで上品で、素晴らしいカッコよさで泳いでいるが、陸上に上がる時もある。小さい時にはまだ白ではない。小魚やそれらの卵・雑草やパンを食べる。泳いでいるのに、羽には水が通らないし、体は常に乾いていて、暖かさを保っている。白鳥は食べるには美味しくなく、肉が固く、消化しにくいものである。肉に多くの炭酸アンモニアと脂分が含まれている。白鳥の皮膚を人間の体の傷んでいる部分の上に置けば、体を温めなければならない。または、湯気を通さなければならない出血や変調の時に効果がある。神経を和らげ、強くする時、自然の体温を戻すため、胃を元気づけるため、溜まった空気を追い払うにも、消化を助けるためにも良い。白鳥の油は痔を柔らかくし、無くす効果も

ある。翼の柄はペンとして使用される。やや小さい野生のハクチョウも同[図LVIの]2を参照。

となる。【図10】が白鳥の挿絵であり、「WILDE ZWAAN」と「TAMME ZWAAN」の2種が掲載されている。斉清はこの本を見て間違いを指摘し、結局はシーボルトも同意したのである。

〔鳥の図鑑とキナキナ〕

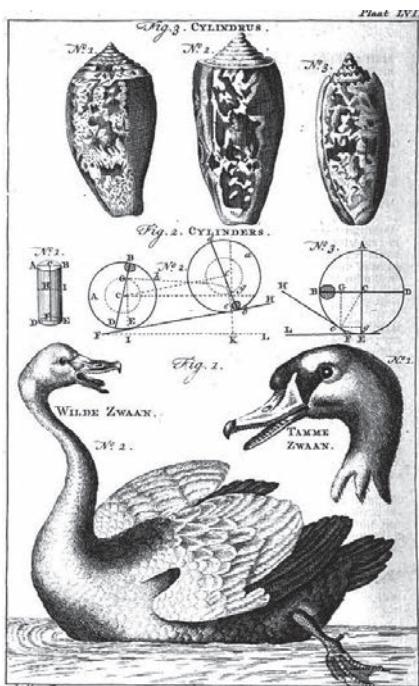
つぎに、シーボルトは鳥の図鑑を出して斉清に読ませようとした。

鳥類ノ図有ル本草ヲ出ス、此方ニナキ鳥多シ、其図説ヲ出ヌ、予ニヨメト云、予詳カニ読コト能ハサレハ、ヨメサル有サマヲ示ス、カレ云、予物産ヲ好ムコトヲ江戸ニテ此ヲ聞キ、ヨメサルコトハ有ヘカラスト云テ、予カ天眼鏡ヲ彼レ取テ進ム、予読トイヘトモ其説ヲ解セス、コレ蘭語ヲシラサレハ也ト、カレ笑テ図ヲミス

鳥が好きな斉清に対し、シーボルトは「ヨメ」と言っておランダ語で書かれた図鑑を見せたが、斉清は躊躇する。江戸でも評判の物産家なのだから、読めないことはないだろうと言うシーボルトは、眼鏡を取って催促する。読むことはできるが、意味が分からないと言う斉清に、もっとオランダ語を勉強しなさいと言わんばかりに笑って図鑑を見せた。続いてシーボルトは、木の枝を採ってきて見せる。

枝ヲ采テ出ス也、キナキナハ此也ト自負ノ躰ニテ花ノサキタル所ヲ引出ヌ示ス、予此木ハ花戸持来リテ、予カ園中ニ多クウユ、幹ノ大サ拳ノ如キ、アマタ有葉ヲモミカケバ胡麻ノ臭有、因テ胡麻木ト云…(中略)…予新葉ヲ摘テカレガ手ニノス、彼モミテカギ、ナルホドト和語ヲナシテ悦ヒタル有様也

「キナキナ」はこれだ、と自慢げに見せるシーボルトに対し、斉清は植木屋(「花戸」)が持ってきて自分



【図10】ボイス「新修学芸百科事典」の白鳥

の庭にもたくさん植えていること、胡麻の臭いがするから胡麻木ということ教える。そして新葉をシーボルトの手に載せる。臭いを嗅いだシーボルトは「ナルホド」と言った。来日5年目であるから、彼もこれくらいの日本語は話せた。



【図11】 南米産の「キナキナ」

機那機那(キナキナ)…(中略)…是レ一種ノ樹皮ナリ。ペーリュニ産ス。…(中略)…本邦有ル事ヲ聞カズ。然レドモ未タ搜索シ得ザル者ナリ。吾邦ト雖ドモ何レノ地方ニカ有ラン。今薬用ニハ一日モ欠くベカラサル品ナリ。予久シク此事ヲ恨テ百方スルニ術無シ

とあり、ペルー原産の「キナキナ」は「一日モ欠く」ことのできない薬であり、吉田は日本のどこかにはないはずだという。吉田と同じように、シーボルトも日本産の「キナキナ」を探していたが、それは胡麻木であって、樹皮からキニーネは採れなかった。【図12】の胡麻木は日本固有種で、スイカズラ科ガマズミ属の落葉小高木。本州の関東地方から九州にかけて分布し、樹高は3～7メートルくらい。葉を揉むとゴマの香りが漂うというのが名の由来である。

【図11】の「キナキナ」は、南米のアンデス山脈に自生するキナ属の植物であり、原住民のインディオはキナの樹皮を解熱剤として用いていた。ヨーロッパ人の渡来とともに広がり、樹皮から採れるキニーネはマ



【図12】 胡麻木

【帰りの挨拶】

「黄昏」となり、齊清は帰ろうとする。するとシーボルトは、

彼レ予カ膝前ニ来り座ス、助十郎・忠次郎左右ニ付添、カレ兩人ニ向ヒ今日ノ如ク物産ヲ好ム客ハ有ヘカラス、当秋帰国ノ同好ノ友ニヨキミヤゲ也ト、其外サマサマ挨拶シケルニ、予モ又江戸ニ行テヨキミヤゲヲ得ツ、且年来ノ疑ノハル、コトアマタ也トテ、座ヲタ、ントスルニ、カレ恭ク謝シ玄関マデ送ル

齊清の膝前に来て座り、謝辞を述べる。通詞の石橋助十郎・吉雄忠次郎に向かって、今年の秋に帰国予定であり、「同好ノ友ニヨキミヤゲ」ができたと言う。齊清もまた江戸への「ヨキミヤゲ」ができたと言い、いくつもの疑問が解決できたと言う。3月5日の午後、シーボルトの部屋で動植物の標本類に囲まれながら話した2人は、互いに得るものがあった。「蘭館紀事」の最後は、「此外種々ノ事アリ、別巻ニ記ス、此一卷ハタ、一日ノ話中ノ一ニヲ記スル也」とあり、詳しくは別巻に記すとある。その別巻が、安部がまとめた『下問雑載』であろうか。

「蘭館紀事」にはないが、『下問雑載』に齊清がカエデの腊葉を送ったことが記されている。そこには、

問

(前略)…我邦槭樹ノ品類甚多シ、今贈ル所ノ腊

葉ヲ以テ知ルベシ、此時槭樹ノ腊葉凡ソ百種ハ
カリナルヲ賜フ、印度ヨリ以西我邦ノ如キ槭ノ
属類アルヤ

答

(前略)…恩賜ノ諸葉ヲ視ルニ野生ノモノ十二種
ニ過ス、近日野生ノ者ノ名ヲ撰ンテ之ヲ献セン
遺忘セシニヤ、後終奉ラサリキ

とまとめられている。齊清が渡した「百種」のカエデ葉は今もオランダの国立植物標本館ライデン大学分館の収蔵庫にあり、表紙にはシーボルト自筆のラテン語で「*Aceris species ac varietates a principe provinciae Tsikuzen nobis communicatae von Siebold* (筑前国主からシーボルトに贈られたカエデ類の種類と変種)」と書かれている。和紙にさまざまな形のカエデ葉を貼り付け、コヨリで綴じている。約140枚の葉が貼り付けられており、なかには剥がれた葉もあり、【図13】に明らかである。このカエデの葉は、最終的に『日本植物誌』において紹介される⁽⁵⁾。



【図13】 齊清からシーボルトへ贈ったカエデの腊葉帖
(オランダ国立植物標本館ライデン大学分館蔵)

『日本植物誌』は天保6～弘化1(1835～1844)年、シーボルトとツッカーニー(ミュンヘン大学植物学教授)によって刊行され、両者の死後の明治3(1870)年、ミクエル(ユトレヒト大学植物学教授)によって追加される⁽⁶⁾。シーボルトが書いた『日本植物誌』のなかの梅の項に⁽⁷⁾、

最も珍重されている変種は八重咲きの花をつけ

る種類で、人家や寺で庭木や盆栽として栽培されている。その数百にもものぼるこうした変種の最も豊かなコレクションは筑前守の所有になるものである。我々がそのうちの最も珍しいもののスケッチを取ることができたのは、筑前守の好意による

とある。日本では梅が愛好され、特に八重咲きの梅が珍重されるという。『日本植物誌』の梅の図版【図14】が描けたのは、齊清の好意によって珍種をスケッチできたからだ、とシーボルトは書いている。確かに、黒田齊清がまとめた『本草啓蒙補遺』(天保～嘉永頃)⁽⁸⁾のなかに、「楽善日、予梅ヲ愛スルコト多年。啓蒙中に三百余品トアリ。予悉ク種類ヲ集ント欲テ、遂ニ八百有余品ニ成レリ」とあるから、彼(「楽善」)は800種ほどの品種を集めており、その中から自慢の梅をシーボルトに提供したのである。シーボルトはそれを日本人絵師の川原慶賀らに描かせた⁽⁹⁾。標本にすると花の色は変わるからである。スケッチされた白梅・紅梅の絵は、ロシアのサントペテルブルクにあるコマロフ植物研究所に残る⁽¹⁰⁾。【図15】があったから、『日本植物誌』の図版を担当するヨーロッパの画家たちは、石版に描くことができたし、印刷された白黒版への手彩色も可能となったのである。スケッチ画の色がそれなりに再現されていることがわらう。もともとは、齊清が八重咲きの紅梅・白梅を贈ってくれたお陰である。『日本植物誌』には、齊清の他に宇田川榕菴や水谷助六、最上徳内などの名前も登場する。シーボルトは標本提供者の名前を記すことを忘れてはいない。

齊清は、日本の鳥の一覧表も提供した。それはドイツのポフム大学にあるシーボルトコレクションにある(No.1.224)⁽¹¹⁾。表紙にタイトルはないが、見開きにシーボルト自筆のオランダ語で「筑前侯に依頼の日本産鳥類に関する生態記録」と記されている(【図16】)。上段に鳥の名前・生息地・餌などの項目が記され、下段をめくるとNo.1「イソワシ」からNo.269「フツポウソウ」まで、鳥の生態がわかるようになっている。この一覧表を写真撮影したとき、手触りが違っ



【図14】『日本植物誌』の梅
(福岡県立図書館蔵)



【図15】紅梅・白梅 川原慶賀の落款がある。
(コマロフ植物研究所蔵)



Bechnote Beschreibung der Vögel Japan

Harocht de ondergeschikte aan Kijns Tonghe. des Vorke mit Trifflanze k. witten mundelen. Stronkitoled.

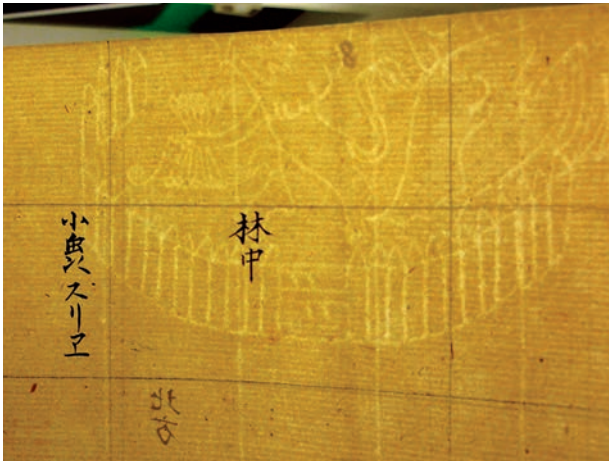
no	Naam chines. Japanees	Opz. kl.	Woortland	Locus orig.	Vogel	Het makke	Waar aanwijzing
	漢名 和名	眼色	Japan, China, Korea: zuidelyk of noordelyk Japan	Japan, Korea, China, Taiwan, Korea, Japan	肉為魚燕外 葉實穀粟	川木葉 海叢	鳴食 來候 雜説
1	インワシ						
2	オホタカ		In Java, Malee, ook ook Korea	In Wallen and Sjongen	Vogel -	鳥類肉	Kommt in Korea auch in Japan vor. Kijns name ist nicht bekannt.
3	ノソリ			And near Japan, auch in Wallen	田野	鳥類肉	
4	フクシカ					山中	
5	ミナコ						
6	ハヤシ			And in Wallen		鳥類肉	海島

【図16】「筑前候に依頼の日本産鳥類に関する生態記録」(ボフム大学図書館蔵)

たので、透かしてみると洋紙であった。出島のオランダ商館が使用していた紙であり、【図17】の透かしのある紙の製造元は不明だが、ライデンにあったファン・ヘルダー社製であろうと思われる。洋紙を斉清が所持していたとは考えられないので、鳥の一覧表を書いてもらうためにシーボルトが贈ったので

ある。

同じくボフム大学のシーボルトコレクション(No. 1.353)に『附言六則』と書かれた和本がある。これは、鳥の一覧表を見るための6つの注意書き、「六則」が和紙に書かれている。内容は、要するに自分の記憶をもとにまとめたので間違いはあるという。



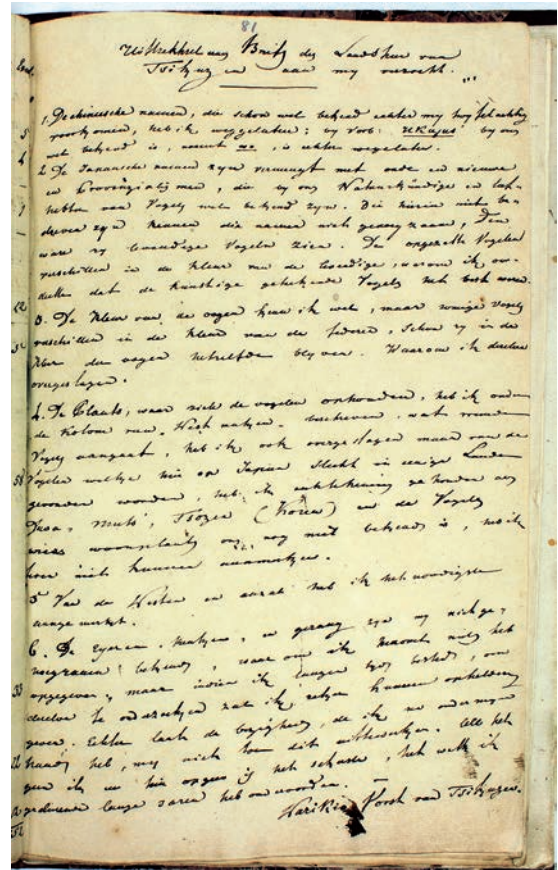
【図17】鳥の一覧表の透かし

凡ソ、右記ス所ノモノハ悉ク諳記スルモノヲ以テ、左右ニ口授シ、草卒ニ筆記セシム故ニ、和名・仮名遣等ノ違イアラン、之ヲ恕察セヨ

このような和文で書かれた注意書きをもらっても、シーボルトは理解できない。彼が理解できるように、翻訳せねばならない。シーボルトの雑記帳(No.1215)⁽¹²⁾のなかに【図18】のページがある。内容は『附言六則』のオランダ語訳であり、最後に「Narikio」とある。シーボルトは、斉清からもらった『附言六則』を翻訳してもらい、雑記帳に書き留めているのである。

彼は、斉清から提供された鳥に関する情報をどのように評価していたのか。文政12年の1829年2月12日付、シーボルト事件で取り調べ中の彼は、オランダのライデン王立自然史博物館の館長テミンクに手紙を出す⁽¹³⁾。テミンクは文政3(1820)年に設立された王立自然史博物館の初代館長で、鳥類学者。シーボルト収集の動植物標本はそこへ送られた。手紙は第3回の船荷65箱の内容を述べ、

剥製またはアルコール漬けの鳥類の採集品は、日本としてはかなり完全なもので、その数も多いのです。アルコール漬けにしたものは大部分は骨格標本か解剖標本です。日本で第1級の鳥類学者、筑前侯のお陰で私は現に生息している鳥類の滞在期間、生活の仕方などを知ることが



【図18】シーボルトの雑記帳(ボフム大学図書館蔵)

でき、また、彼自身の自筆のラベルをつけて送ってくれた標本と日本流に命名した報告といったものを手に入れました。

とある。シーボルトは斉清のことを「第1級の鳥類学者」といい、提供された情報を高く評価していたことがわかる。彼は、斉清が贈った鳥の一覧表をドイツ語で再整理・追記しており、【図19】は斉清提供の一覧表のNo.62「カワラヒワ」と、シーボルトがドイツ語で整理したNo.62「カワラヒワ」。これらをもとに『日本動物誌』の「カワラヒワ」が作成されていくのである⁽¹⁴⁾。

「蘭館紀事」のなかで、斉清は「年来ノ疑ノハル、コトアマタ」と述べている。シーボルトとの面会によって、彼はどのような疑問を解決できたのだろうか。斉清が文政8(1825)年、ガチョウの生態についてまとめた『鶩経』は、その後の新知見を「附録」として追記している⁽¹⁵⁾。文政11年春の「附録」に、

カワラヒワ 62.	金翅雀ノ種	カハラヒワ タビヒワ	39	樹上	穀類木質 草質葉類	樹上	11
アサヒキ 65		此若未聞					

齊清が提供した鳥の一覧表

Messias	61	カワラヒワ メテヒワ	62	金翅雀ノ種	アサ	Plant im Broteum	auf Bäumen	isst Getreide kann löbliche Genüße	nistet auf Bäumen	wird als wilder Vogel gehalten
---------	----	---------------	----	-------	----	------------------	------------	--	----------------------	-----------------------------------

シーボルトが整理した鳥の一覧表

【図19】「カワラヒワ」のデータ



『日本動物誌』の「カワラヒワ」
(福岡県立図書館蔵)

鶯ハモト 駕鶯 駕鶯ハ野鶯ナリ、和名サカツラナリノ
卵ヲエテ鶏ニイダカシメテ羽化シ、其子ヲ養テ
千数十年ヲ経テ蒼鶯ヲ生シ、百有余年ヲ経テ花
鶯・白鶯、ヲヨビ其他ノ数種ノ鶯ヲ生ストヲモ
ワル、予如此説ヲナスコト数年、然ニ蘭説ハ駕
鶯ノ若キモノヲトラエ得テ子ヲ生シ、数十年ヲ
経テ蒼鶯ヲ生シ、二百有余年ヲ経テ花鶯・白鶯
ヲ生ス、数年ヲ経テ数種ノ鶯ヲ生スト云、此説
ヲ聞テ、予カ説ト大同小異セルコト、雀躍不斜、
因テ文政戊子(※文政11)季春附録之

楽善堂

とある。「楽善堂」黒田齊清は、カラフルな蒼鶯や花
鶯・白鶯などがどのように発生するのかについて、
飼育を通して仮説を立てていた。それは、野生の鶯

の卵を鶏に抱かせて羽化させ、「千数十年」を経て蒼
鶯が生まれ、「百有余年」を経て花鶯や白鶯などが生
まれるとするものであった。この説を考えていた齊
清は、文政11年の春に「蘭説」を聞く。その「蘭説」は
自分の考えと「大同小異」であったので、「雀躍」(小
躍)が「不斜」なほど喜んで追記した。ここに、シー
ボルトの名は何も記されていないが、3月5日の交
流が背景にあると考える。シーボルトとの面会は、
齊清にとっても、得るところの多いものであった。

安部龍平は『下問雑載』の跋文にあたる「附言」にお
いて、シーボルトは「草木ノコトニ長ス、詳密殆神
ニ入ルト云ベシ」といい、しかし「飛禽ニ至テハ我君
侯ニ及ハサルコト萬々ナラン」という。植物に詳しい32歳のシーボルト、鳥に詳しい33歳の齊清。得意
分野は異なるが、ともに若手の博物学者である。文
政11(1828)年3月5日の出島での面会は、半日ほど
であったが、相互に楽しい一時を過ごすことができた
学术交流であった。

このときから約半年後、シーボルト事件が起こる。
その風聞において、シーボルトはロシア人、筑前の
殿様である黒田齊清がそう言っている、という噂が
形成される。齊清は、シーボルトの出身地がドイツ
のヴェルツブルクであることを正確に知っており、
そのようなことは言わない。実態に関係なく形成さ
れる風聞の背景に何があるのか、検討しよう。

[注]

- (1) 国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究』(青裳堂書店、2006年)
- (2) 「尾形家資料」、福岡県立美術館蔵
- (3) 山脇悌二郎『近世日本の医業文化』146頁(平凡社、1995年)、岡部進『くすりの発明・発見史』166頁(南山堂、2007年)。また、シーボルト自身も「キナキナ」を持ち込んでいたことが、文政六年「脇荷物差出シ」(「元山文庫」152-83号、九州大学記録資料館九州文化史資料部蔵)からわかる。「五番部屋 しいほると」の項に「一、細末キナキナ拾五ホント」とある。個人荷物としてオランダ船に積むことができた「脇荷」の売却益は、個人の利益であり、ガラス器や薬品類が多い。
- (4) 宗田一『渡来薬の文化誌』234頁(八坂書房、1993年)
- (5) 大場秀章監修『シーボルト「日本植物誌」』266頁(八坂書房、2007年)に、ミクエルが書いた『日本植物誌』のカエデの翻訳文がある。

この植物は葉の形が実に変異に富み、そのことからするとシーボルト・ツッカーニ両氏がこれに与えた種名(A.polymorphum)にふさわしい。この種はヨーロッパでも丈夫に育ち、すでに数多くの変種が公園や庭で栽培されている。シーボルト氏は筑前守から小さな押葉帳をもらっているが、これには日本で知られているこの植物のあらゆる変種の葉が含まれていた。これは、ライデンの標本館の、標本包みをいっぱいにする分量である。接ぎや取り木によって容易に増やせる。

- (6) 山口隆男『シーボルトと日本の植物学』(『CALANUS』特別号1、1997年、熊大合津臨海実験所報)、石山禎一『シーボルト 日本の植物に賭けた生涯』(里文選書、2000年)
- (7) 大場秀章監修『シーボルト「日本植物誌」』32頁(八坂書房、2007年)
- (8) 『本草啓蒙補遺』(福井久蔵編『秘籍大名文庫 本草啓蒙補遺』、厚生閣、1938年)
- (9) 野藤妙『シーボルトの絵師、川原慶賀とCarel Hubert de Villeneuveによる絵画制作について』(『一滴』22号、津山洋学資料館、2015年)
- (10) 1868年のシーボルト死去後、未亡人からロシアへ植物画は売却された。
- (11) 「Eene Beknopte Beschryving der Vogeien Van Japan Verzoekt de ondergetekende aan Zyne Hoogheid den Vorsten von Tsikuzen te willen mededeelen」(ボフム大学図書館 シーボルトコレクション 1.224)
- (12) 「Miscellanea zoologica zootomica」(ボフム大学図書館 シーボルトコレクション 1.215)
- (13) 酒井恒・ホルサイス『シーボルトと日本動物誌』253頁(学術出版会、1990年)、栗原福也編訳『シーボルトの日本報告』267頁(平凡社東洋文庫、2009年)
- (14) 山口隆男『CALANUS』11号(1994年、熊大合津臨海実験所報)
- (15) 『鴨経・鶯経』、東京国立博物館蔵。錦織亮介「福岡市美術館所蔵『鶯鳥図』と福岡藩十代黒田斉清」『福岡市美術館紀要』1号、2013年)

3. シーボルト事件の再考

シーボルト事件に関する通説的理解を、『国史大辞典』(吉川弘文館)をもとに要約すると、

文政9(1826)年の江戸参府以来交際のあった幕府天文方高橋景保との通信贈答などは、一部幕吏のひそかに注意するところとなっていたが、同11年3月にシーボルトが高橋および普請役間宮林蔵に届けた彼の贈り物が官憲に知られ、幕吏は高橋の身辺をひそかに監視していた。同年8月に長崎地方を襲った台風のため、シーボルトが荷物を積込んだ蘭船コルネリス=ハウトマン号が稲佐海岸に座礁した。その修理のため積荷を一旦卸したとき、当時外国人の国外持出しを禁ぜられていた日本地図などの物品が現われた。この事件から2か月を経た10月10日、高橋は町奉行所に逮捕され入牢。ついで11月1日急使が長崎に到着、長崎奉行はシーボルトを抑留して商館長預けとし、出島各所を探索して多くの物品を押収、またオランダ通詞吉雄忠次郎ら約50人が処分された。シーボルトも国外追放となった。

となる。こうした通説に対し、すでに早くから梶輝行氏⁽¹⁾は、オランダ船に積み込まれていたのは、船体を安定させるためのバラストとしての銅だけであったことを、商館長の日誌をもとに明らかにしていたが、いまだに座礁したオランダ船から禁制品が見つかったという説は根強く残っている。台風の襲来は事実であり、気象学者による研究もある。1991年に北部九州を襲い、東北に再上陸してリンゴ農家に大きな被害をもたらした「リング台風」と類似の経路・勢力をもっていたという⁽²⁾。甚大な被害をもたらしたシーボルト台風と、日本地図を持ち出そうとして発覚した事件は、当時どのように噂されたていたのか、松浦静山『甲子夜話』に見よう。

平戸藩9代藩主の松浦静山は、文化3(1806)年に隠居し、和漢の書籍をはじめ西洋の文物を収集した

蘭癖大名である⁽³⁾。江戸で暮らす静山が、文政4(1821)年11月の甲子の夜に執筆を開始した随筆集『甲子夜話』続編卷之廿・廿一に、シーボルト事件に関する記事がある⁽⁴⁾。最初の記事は、文政11年10月10日の夜、天文方の高橋景保が捕らえられたことに始まる。静山は「予嘗て笙を学びし人なれば、罪はあるべけれど、不憫にこそ覚ゆれ」という。高橋に雅楽器の笙を習っていた静山は、このときはまだ高橋の捕縛理由がわからなかった。それから約1か月後の11月15日付で長崎から情報をもたらされた。その情報によって、静山はその理由を理解する。ただし、はっきりしたことは不明なので「風説」のままを記すと断っている。長文であるが、シーボルト事件の風聞に関するもっとも早い時期の記事なので、省略せずに全文をあげる。

長崎の人より予が中の者に文通せしあり。この文に拠れば、前に云高橋が屋舗に一夜捕手の来りしは、このことならん。されども是等の実否は外人の知る所に非ず。徒風説のままを記す。

御奉行所え江戸御宿継、去る十日到来之处、外料阿蘭陀シイボルトえ天文台より書通いたし〔高橋作左衛門殿、並在府通詞猪股源三郎より〕、日本刀剣之類、並江戸、大坂之地図、蝦夷地図、日本絵図、其外狭間合戦等画人之書、送遣居候趣〔刀之類は何方より遣候哉、未御吟味之節不相知。江戸、大坂之地図は、参府之節相求候由。蝦夷、日本之図、作左衛門殿より送遣し候由、狭間合戦、外に禁庭之絵図、其外古合戦等之絵図、凡廿五六枚も有之候得共、何方より相渡候哉、未相知由〕、於江戸逐一申出候もの有之候旨申来、同夜検使四人〔内壺人御用人〕出島え出張、右シイボルト所持之道具不残御封印に而、御取揚相成候处、不及異儀相渡、無事に引取相成候处、日本之図、右道具之内に無之、又々翌日御吟味之处、懐中いたし居候趣に而差出候由〔大造之紙数懐中致居候は、其節見出し可申之処、花畑之東角石杯之下に隠し居候哉、翌日

何となく其所に参、懐中いたし候様子〕、右江戸より之書通取次之通詞馬場為八、吉雄忠次郎、堀儀左衛門、稲辺市五郎、年番年寄せ御預に相成居候〔四人之内、吉雄忠次郎え送遣候旨、高橋作左衛門殿より被申出候に付、従江戸名差来、馬場は猪股より書状送遣候旨、申出候付、名差来、堀も同断、稲辺は馬場為八え送来候書状を取次、阿蘭陀え相渡候旨に而御取しめ〕。右之品々御取揚相済候に付、即刻以宿継御届に相成、御下知迄は右通詞居宅え、同役より四五人づ、夜番被仰付候由。

一、阿蘭陀船も浮方出来、来月十日頃には出帆可仕由に御座候。前文シイボルトは相残候様被仰付候。右之通大風雨に而蘭船不及難渋候はゞ、最早シイボルトも品々積入、無滞出帆可仕之処、其儀不相成、誠に神風にも有之候哉と風聞仕候。シイボルトはヲロシヤ人に而は無御座候哉。筑前様至而蘭学御功者に而、江戸に而もシイボルト之墨跡御覧之处、何れ阿蘭陀に而は無之、能々承札候様、再三被仰下候由に候得共、通詞杯も一向存不申、当春美濃守様御同道に而御越、両館御見分之節、シイボルト部屋え半日斗も御滞被遊、色々御聞事御座候而、御帰館後、又々右シイボルト儀は弥ヲロシヤ人に相違無之と見受候間、猶承繕候様被仰置候由に而、猶又問合候处、御疑御尤千万。実は本国に無之、ヲロシヤ境辺のもの之由申出候旨、右風聞承候俣、荒々申上候。

十一月十五日

「長崎の人」から江戸の静山へ報された内容は、前段がシーボルトの取り調べが開始され、天文方の高橋作左衛門景保からシーボルトへ渡した「蝦夷地図」や「日本絵図」などが押収され、これに関与したオランダ通詞の吉雄忠次郎らも取り調べられているというものである。注目したいのは後段の部分である。傍線部①の部分で、座礁したオランダ船は復旧し、来月10日頃に出帆可能となったが、シーボルトは残ることが言い渡された。もしオランダ船が座礁しな

ければ、シーボルトは早々に禁制品を積み込み出帆できたのであるが、それはできなかった。まさに台風は「神風」だった、という。

この部分から、当時の長崎では、シーボルトからの日本地図等の押収とオランダ船の座礁は別々の事件として語られていることを指摘できる。座礁したオランダ船から禁制品が見つかったわけでないで、「長崎の人」はそれぞれを別の事件として松浦静山へ報せているのである。つづいて傍線部②以下の部分において、シーボルトは「ヲロシヤ人」ではないか、という風聞が記される。シーボルトのことを疑い、彼を「ヲロシヤ人」と言ったのは「筑前様」=黒田斉清だという。斉清は蘭学に詳しく、江戸でシーボルトの筆跡を見て疑いを持ち、問い質すよう要請したが、オランダ通詞では分からなかった。春に「美濃守」=黒田長溥と出島に入り、シーボルトの部屋に半日ほど滞在した斉清は、長崎の福岡藩蔵屋敷へ帰ってから、やはりシーボルトはロシア人に相違ないと言った。ふたたび問い合わせたところ、シーボルトは「お疑いはごもっともです。本国ではありませんが、ロシア境辺の者です」と申し出た、という風聞である。

斉清がシーボルトの出身地を正確に理解していたことはすでに明らかにした。彼らが会ったことは長崎でも噂になっていたであろうが、風聞は実際に関係なく創られる。シーボルト=ロシア人とする説を補強するために、斉清が使われ、両者の交流が使われているのである。

翌文政12年1月8日付でふたたび静山のもとに長崎からシーボルト事件の経緯と噂が報されてきた。吉雄忠次郎らが入牢となったこと、シーボルトから取り上げられた地図は「凡二間方計に出来、其中に国々之形勢巨細に図し有之、別而城郭之図、精微」だという。そしてシーボルトは「露西亞人」であり、商館長もロシア人であり、「同国より紅毛国え養子」となった者だという。

これらの情報を聞いた静山は、最後に感想を書いた。かつて寛永期(1630年代)にオランダ商館が平戸から長崎へ移ったとき、平戸藩から長崎へ移住した通

詞たちがいたが、今回の事件で処罰されたオランダ通詞にその姓の者はいなかった、と安心する。

予が家より附遣したる通詞共の姓は一人も見へず。これ僥倖なれど、予にとりては今日の面目なり。其通詞の家と云は、石橋氏、名村氏、榎林氏、本木氏、横山氏、志築氏等なり。是等のもと予が家頼どもなり。

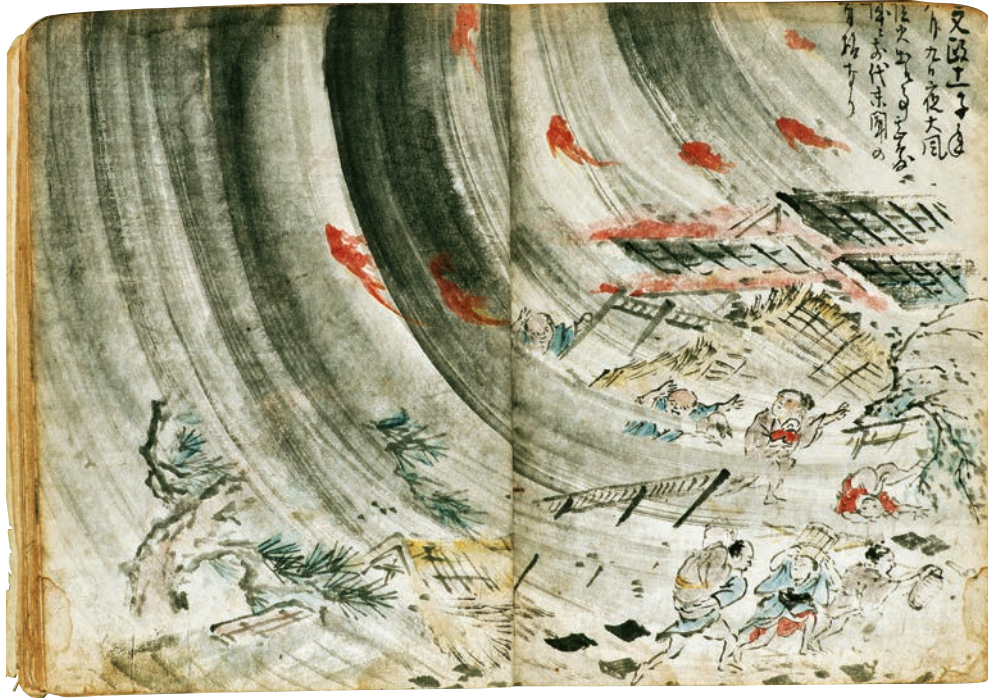
『甲子夜話』に記された風聞は長崎で広まっていたものであり、そこでは日本地図等の没収と、オランダ船の座礁は別の事件として語られていた。しかし、長崎以外の地では2つの事件は結びつけて語られた。どのように結びつくのか、小倉藩の城下町に近い企救郡小森手永の大庄屋中村平左衛門の日記を試みる⁽⁵⁾。中村は日々の記事を記すとともに、その年の最後に1年間に起こった重大事件を記す。文政11年に起こった重大事件の一つに、

一、当秋八月十日の大風にて、阿蘭陀船長崎の湊ニ有之候を岡ノ小高キ所ニ吹上ケ候よし、已然の所ニおろし候事甚六ケ敷、方々より参り段々積り方等致候へ共、甚大造の銀目にて急埒不致、夫是延引致候内右船中ニ日本の兵器等有之候を見掛、夫より委敷相改候処兵器夥敷、専一日本の地図委敷相記候書類等有之、段々御吟味有之候所、江戸天文家の内蘭人と密談ニおよひ、日本を覆ス謀計有之候由、其外江戸にてか担の人も多ク御大名様方ニも有之由、其外筑前・肥前辺ニも一味の者追々ニ分り候由風説有之候、右蘭人ハヲロシヤの人近来蘭人と号し参り候ともいふ説あり、甚敷異変ニて候

とある。8月の台風で座礁したオランダ船の復旧が難航するうちに、船内から兵器が見つかり、さらに日本地図なども発見された。これは、天文方の高橋と「蘭人」が密談して日本の転覆を企てたものだった。これに荷担する大名もおり、「蘭人」はロシア人

であり、オランダ人として日本へやってきた、という。

2つの事件は見事に結びつけられ、座礁したオランダ船から武器や日本地図などが見つかった、と語られている。そして、そのようなことを企てた「蘭人」はロシア人である、という。中村は文政11年暮れにこの「風説」を記しており、当時から長崎以外の地でこのように語られていたことがわかる。



【図20】 文政11年8月の台風『旧稀集』(福岡市立博物館蔵)

同様の風聞は福岡藩でも語られていた。福岡藩の博多商人が記したの『旧稀集』をあげる⁽⁶⁾。博多中島町の曲げ物細工商庄林半助が後年になって回想を交えながら記述した絵入り見聞集である『旧稀集』は、文化・文政期の記事が充実している。【図20】は文政11年8月の台風に関するものであり、「前代未聞の有様」とある。『旧稀集』のなかで、シーボルトは「シイフリ」と記され、文政8(1825)年にやってきたオランダ人のなかに「シイフリト申者来り、此人ヲロシア人ト申」とある。シーボルト来日は文政6年なので年代を間違っているが、彼をロシア人とする論拠は説得的であり、福岡藩主黒田斉清の発言に求める。「子ノ春」(文政11年)に「大殿様・若殿様」は長崎見廻りへ行き出島に入った。「大殿様」= 斉清は通詞なしでオランダ人と会話ができるほど蘭学に詳しく、出島

の訪問後に「シイフリは蘭人ニてはなく、ヲロシアニ相違有まじ」と仰せられた。斉清の見通しは正しく、「此者御殿様御眼鏡ニーツも相違なし」であった。つまり、シーボルトは日本地図など禁制品を持ち出そうとしたが、「子ノ年秋台風ニて蘭船イナサの沖ニ上ル、此節段々荷物しらベニシイプリ写取し物事々あらわれ」、座礁したオランダ船から禁制品

が見つかったのである。その他、シーボルトに関わって「金まふけ」(金儲け)した者20人が処罰され、文政12年に帰った「シイフリ」はオランダ人の国で処罰され、天保1年夏に来航したオランダ船が彼の「生首を塩漬」にして持ってきたという。

小倉と博多に広がった風聞を構成している基本は、座礁したオランダ船から

の禁制品発見、シーボルト=ロシア人、ということである。特に小倉の風聞は、事件が起こった文政11年に書かれている。小倉と博多の記録は噂を書き留めたものであり、それを広めるものではないが、天保4年(1833)に江戸・大坂の書肆から刊行された中島廣足『樺島浪風記』⁽⁷⁾は違う。

中島廣足は熊本藩士、30歳で隠居し、文政11年には長崎に滞在して実際にシーボルト台風に遭遇した。彼は8月7日の昼過ぎに長崎を熊本藩の船で出発、樺島付近で潮待ちをしていたときに暴風雨に襲われた。船は難破し11日に奇跡的に長崎に帰り着き、街中の被害を目の当たりにした。『樺島浪風記』の跋文に当たる巻末に、

こたびの大風は、まさしく神風なりと世にいひ

ながせるはさる事ありけり、かの阿蘭陀船はこたびかへるべきときにて、其船の中にわが国の地図をはじめて外国にわたすことをいみじくいましめたまふ物どもを、たれか取つたへけむ、くさぐさつみいれ、ものしいたるを、此大風にあひて、船(※オランダ船)をふきあげられしかば、やがてこなたの司人(※役人)たちゆき見て、つみ入たる物どもとりおろし、とかくせらるゝついでに、さるものども(※禁制品)ミなあらはれ出て、ことごとにおほやけにめしあげ、取おさめられぬ…(後略)

天保四年正月十五日檀園のあるじ(※中島廣足)、長崎のたびやどりにて、ふたゝび此よしをしるしぬ

とある。中島廣足は国学者で歌人、平田篤胤に「西の国にて古へ学をおこすは廣足を頼みにおもうなり」と期待されており、歌集の他に随筆や紀行文など著書も多く、また彼を慕う門人も多かった⁽⁸⁾。その中島が実際に台風に遭遇し、九死に一生を得た経験を書き記したものであるから、『樺島浪風記』の巻末にある台風＝「神風」説と、「台風→座礁→禁制品発覚」説は、信憑性をもつものとして世間に広まった。

明治に入り、この説は補強される。補強したのは田辺太一である。彼は幕末に幕府外国方、明治期に外務省書記官を勤めた外交官僚であり、明治31年(1898)年に『幕末外交談』を出版した⁽⁹⁾。本書は、幕府の側から著した幕末史の名著とされ、自序によると、思い起こすままに読売新聞に連載したものをまとめて本にした、とある。田辺氏はシーボルトの日本滞在中の活動の概要を記した後に、

ところが、その帰国のとき、荷物を積んだ船が台風のために再び長崎へ帰ってきた。幕府の法律では、出港の際に積荷を精査することはなかったが、入港の船は密輸入を防ぐために必ず厳重に積荷検査をすることになっていたのである。この検査によって、積荷の中にシーボルトの荷物があつた、その中から当時国禁とされて

いた秘籍が発見されたので、シーボルトは幕末によって出島に幽閉され、これと交際していたもの、ことに禁書などを贈った高橋作左衛門などが、それぞれ厳罰に処せられた。

と記す。これによると、ハウトマン号が台風のために一旦長崎港を出てふたたび帰って来たので、再入港とみなされ、当時の法に照らしてその積荷が厳重な検査の対象になり、この検査によってシーボルトの積荷から禁制の「秘籍」が見つかった、とある。田辺氏はハウトマン号の座礁を再入港と規定することによって、積荷検査の必然性と禁制品発覚を結びつけたのである。呉秀三氏も田辺説を採用する。『シーボルト先生－其生涯及功業』に⁽¹⁰⁾、

シーボルト先生の荷物を積み居たる帆前船は將に出発せんとして未だ出発せずでありければ、暴風に煽られ驕波に揉まれ、一度出でゝ、又戻り、遂に稲佐の割石に打付けられて舳頭はその或家の二階に寄りかゝれり。然るにその当時の法規として、外国船の出帆にはその荷積は何なりとも問ふことなけれども、入港するものは必ずその積荷を悉く点検するのは法規なりしかば、此度も、この例にあてゝ、奉行所の吏員は一々その荷物を解き検むることゝなりしに、シーボルト先生の行李中よりは種々なる国禁の品々相尋ぎて露はれ出でたり

とある。呉氏は、田辺氏が言うことは「予が父母より直接聴き取りたる所も亦此の如くなり」と註記しており、自分が親から聞いた話と同じであるという。呉氏の著書に掲載されることによって、「台風→座礁→禁制品発覚」説は学術的裏付けを与えられて広がっていくことになる⁽¹¹⁾。

参考として、シーボルト自身が書いた事件に関する記述をあげる。日本を離れて4年後の天保5(1834)年、ドイツで刊行された百科事典の『ブロックハウス百科辞典』4巻に「シーボルト」の項がある。これ

は、ドイツのドレスデンにいた辞典編集者からヴェルツブルク在住のシーボルト母アポロニアに執筆依頼があり、母親からオランダのライデンにいたシーボルトに伝えられて、彼自身が書いた略歴とシーボルト事件の概要である⁽¹²⁾。事件について、シーボルトはつぎのように記している。

予測しなかった突発的の事件がおり、自由を奪う捜索がくりひろげられた。このような結果になるとは、予想しなかった捜査がおこなわれたのである。皇帝の書物奉行で天文方の高橋作左衛門(景保)は、1826年に江戸において、幕府の命令で作成した日本国の地図を手写することを約束した。この伝達は秘密裏におこなわれ、なんら問題なく実行された。この地図を手写し完成させた製図工に対し、作左衛門が侮辱的な扱いをしたことから、この秘密が露見することになった。

他の人々の悪意や間宮林蔵のような人物の策略が、作左衛門の行為を重大な国事犯罪とみなして公にし、シーボルトは生粋のオランダ人ではなく、かつてロシアの使用人として日本にやってきたドイツ人を想起させ、また、費用のかかる研究や江戸に滞在したいという努力、これらすべてが幕府側の猜疑心を呼び起こしたのである。…(中略)…いまや作左衛門は国の裏切り者、シーボルトはロシアのスパイで、国事を犯していると信じられたのである。作左衛門、製図工、数人の日本人が逮捕され、奉行所内に捜査班がもうけられた。

この記述から、シーボルトが伊能忠敬の実測にもとづく日本地図の写しを高橋作左衛門景保に依頼したこと、高橋が製図工に侮辱的な扱いをしたこと、および間宮林蔵らの策略によって事件が明るみとなったこと、高橋は「国の裏切り者」、シーボルトは「ロシアのスパイ」と呼ばれたことがわかる。これをシーボルト自身が書いているから、彼は自分がロシアのスパイと噂されていたことを自覚していたのである。

〔注〕

- (1) 梶輝行「蘭船コルネリス・ハウトマン号とシーボルト事件」(『鳴滝紀要』6号、1996年)。
- (2) 海老原温子・宮崎克則「創られた『シーボルト事件』」(『西南学院大学国際文化論集』25-1号、2011年)参照
- (3) 松田清「松浦静山-蘭癖大名」(鳥井裕美子他編『九州の蘭学』思文閣出版、2006年)
- (4) 中野三敏他校訂『甲子夜話続編』2、110・133・233頁(平凡社東洋文庫、1979年)
- (5) 『中村平左衛門日記』4(北九州市立博物館、1985年)
- (6) 『旧稀集』(福岡市博物館蔵)。シーボルト事件の風聞に関する全文をあげる。

此夏ヲランダ船長崎へ来ル、右蘭人の内ニシイフリト申者来り、此人ヲロシヤ人ト申、其次第は後ニ子ノ年春大殿様・若殿様長崎出浮之節、蘭人の屋敷へ御入ニ成、其節段々様々けふおふ致ス事無限り、大殿様至テ蘭学くわしくツウジなしとて蘭人ニ取合為遊、後ニ御屋敷ニ引取遊ばし、其節シイフリは蘭人ニてはなく、ヲロシヤニ相違有まじと被仰し也、後ニ此者御殿様御眼鏡ニーツも相違なしと云、此シイフリト申者至テはつめい限り無、段々日本草木・鳥類・はく類・魚虫類モ生類干類フランロニしやうちう仕立ニて入、其かたち少しもへんぜぬ様ニ入もとる、且は富士山のちりくわしき図面、禁裏御殿の図、江戸御殿の図、三ヶ津図、日本図、鯨をとる事を写し何ニよらずくわしく、酒造・醤油・紙をすく・ほりもの・大工鍛冶職迄日本国中ニ有程の事をくわしく写取、然ルニ子ノ年秋台風ニて蘭船イナサの沖ニ上ル、此節段々荷物しらべニシイフリ写取し物事々あらわれ、此時ヨリ至テ詮議さびしく江戸ヨリ長崎迄シイフリニ掛ハリ金まふけし者二十人、長崎江戸ニて御仕置成ル、然ルニ丑ノ年シイフリ帰り、寅ノ年之夏長崎へ蘭船来り、其節蘭人の国ニて右之シイフリ、かの国ニて仕置致せしとて生首を塩漬ニして持来りし也、此首何やら次第はわかり不申となり

- (7) 中島廣足『樺島浪風記』(九州大学付属図書館蔵、549-カ-22)。吉良史朗「中島広足『樺島浪風記』の変容」(『国語国文』80巻4号、2011年)
- (8) 彌富破摩雄「中島廣足」(厚生閣、1944年)。「日本古典文学大辞典」(岩波書店、1984年)
- (9) 『幕末外交談』1・2巻(富山房、1898(明治31)年、平凡社東洋文庫、1966年)、1巻183頁
- (10) 呉秀三『シーボルト先生-其生涯及ビ功業』233頁(吐鳳堂、大正15年、復刻版、柳原書店、1979年)。呉秀三『シーボルト先生-其生涯及ビ功業』I-248頁(平凡社東洋文庫、1977年)
- (11) シーボルト研究の入門書というべき人物叢書の板沢武雄『シーボルト』(104頁、吉川弘文館、1960年、新装版1997年)では、田辺氏のいう再入港規定について、「暴風の中を一度出でてまた戻るということは常識からいってもありえない」と疑問を呈しているが、「台風→座礁→禁制品発覚」説を否定することなく、中島廣足『樺島浪風記』が「真相に近いようだ」とする。
- (12) 石山禎一「シーボルトの生涯をめぐる人びと」13頁(長崎文献社2013年)

おわりに

本稿では、シーボルトと黒田斉清の交流実態、シーボルト事件の風聞について検討してきた。最後に2点を指摘しておきたい。

1点は、なぜシーボルトはロシア人と呼ばれたのか、である。アメリカ人やイギリス人でなく、ロシア人とされた背景には、当時のロシアに対する危機意識がある。約20年前の文化1～2(1804)年、長崎にレザノフがやってきて通商を求めたが、これを幕府は拒否、その後にロシア船がサハリン・エトロフを襲撃した⁽¹⁾。この「文化露寇事件」によって、ふたたびロシアが攻めてくるかも知れないという危機意識が、幕閣などの上層部だけでなく、庄屋レベルの民間でも共有されていたから、日本地図を持ち出そうとして捕まったシーボルトは“悪い奴”、“悪い奴”はロシア人、という風聞が形成されたと考えられる。文化5(1808)年にはイギリスのフェートン号がオランダ船を拿捕しようとして長崎港に侵入する事件も起こっていたが、シーボルトをイギリス人とするより

も、ロシア人とした方がスムーズに風聞は広がったのである。その風聞を補強するために、黒田斉清は使われた。

2点目は、オランダ船の座礁とシーボルトからの禁制品没収は別々の事件であるにもかかわらず、当時から結びつけて語られたのはなぜか、である。「台風→座礁→禁制品発覚」説は、台風をただの台風とするのでなく、日本地図を持ち出されそうになった国難を救った「神風」と規定する。台風を「神風」とする表現は明治になるとなくなるが、シーボルト事件を「台風→座礁→禁制品発覚」と連結して語ることによって、「神国」日本を再認識できる心地よい物語として、事件が起こった文政11年から今日まで根強く語り続けられてきたのではないだろうか。

〔注〕

(1) ロシアへの危機意識については、横山伊徳『開国前夜の世界』(吉川弘文館、2013年)、松尾晋一『江戸幕府と国防』(講談社、2013年)

〔付記〕

本稿は、日本史研究会の2015年度大会報告をもとにする。機関誌『日本史研究』643号では、図版の掲載ができなかったため、本誌で掲載した。

宮崎 克則(みやざき かつのり) 西南学院大学教授・西南学院大学博物館館長